

アルコールと健康に関する学術情報集 (IV) 編集者より

滋賀医科大学生活習慣病予防センター特任教授 上島 弘嗣

はじめに

飲酒と喫煙はしばしば併せて議論されることがあるが、喫煙問題は『たばこの無い社会』を目指して進むことで、世界の公衆衛生対策は概ね一致しているが、飲酒はそうではない。飲酒習慣はその飲み方と量によって健康障害への影響が異なることや、文化としての重要な一面がある。そうは言っても、多量飲酒による健康障害の重要性は看過できない状況にあり、世界保健機構 (WHO) は、飲酒の健康障害への対策に重点的に取り組むこととなった。

日本人男性の飲酒量は、米国人や英国人男性の量に比して多いことは、実際に 1980 年代からみられていたが、あまり認識されていなかった。1990 年代の後半に実施された国際共同研究でそのことは明瞭とあった。日本人の平均飲酒量が少ないという認識が広まっていたのは、酒税統計から男女込の一人当たりの飲酒量を世界各国と比較した統計成績からであったが、日本人女性が男性に比して飲酒率が低く、飲酒者でもその量も少ないことを考慮すると、日本人男性ではまったく異なった結果になる。また、未成年者における飲酒者の増加や、女性飲酒者の増加を考えると、飲酒と健康障害に関する研究は、古い課題であっても気を抜けない。もちろん、アルコール依存症の予防と治療の観点からも重要であることは論をまたない。

本書の内容は、アルコールに関する疫学研究から、アルコールに関する代謝・薬理学的な研究、精神医学的な研究と大きく 3 分野に及ぶものである。この 3 分野の中から、それぞれの専門分野の研究者が重要な論文をスクリーニングし、分かりやすく要約したものである。期間中の世界でのアルコールと健康に関する研究がどのように進み、何が問題となっているかが分かる資料になったと考えている。

本書がアルコール問題に関心のある方々の参考になれば幸いである。

上島弘嗣

1971 年 金沢大学医学部卒、大阪府立成人病センター、大阪大学医学部公衆衛生、国立循環器病センター集団健診部を経て、1989 年より 2009 年まで滋賀医科大学社会医学講座教授、2009 年 4 月より同、生活習慣病予防センター特任教授、5 月より同名誉教授、現在に至る。